

# 金印「漢委奴国王」の読みと意味について

黄 當時

## 1. はじめに

志賀島出土の金印「漢委奴国王」の五文字をどう読むかは、人々を悩ませてきた問題である。「委奴」の「委」は「倭(ワ/わ)」を省画<sup>101)</sup>したものでやはり「ワ/わ」と読み日本を指す、ということはわかって、「奴」をどう理解するのか、ということがよくわからないからである。今日では、一般に、三宅米吉説<sup>みやけよねきち</sup>に従って「漢の委の奴の国王」と訓んでいるが、依然、異説が唱えられ、決定打ではない。『広辞苑』(第五版、p. 2877)、『日本国語大辞典』(第二版、第三巻、p. 1372)は、それぞれ次のように説明している。

### わのな-の-こくおう-の-いん【倭奴国王印】

一七八四年(天明四)、筑前国(福岡県)粕屋郡志賀島<sup>しかのしま</sup>から出土した金印。二・三<sup>センチメートル</sup>平方で「漢委奴国王」の文字がある。後漢の光武帝が五七年、同地方にあった小国家の君主に与えたものと見られている。漢委奴国王印。

### かんのわのなのこくおう-の-いん【漢倭奴国王印】

天明四年(一七八四)、福岡市東区志賀島(しかのしま)で発見された金印(きんいん)。縦、横とも二・四センチ<sup>メートル</sup>、高さ〇・九センチ<sup>メートル</sup>の上に高さ一・五センチ<sup>メートル</sup>の鈕(つまみ)がついていて、印面には「漢委奴国王」の文字が刻まれているが、「委奴」は「倭奴」かという。「後漢書-東夷伝」の光武帝が、朝貢した奴国に印綬を授けたという記事に照応するものと考えられている。倭奴国王印。いどこくおうのいん。金印。

『広辞苑』『日本国語大辞典』とも見出し語は、原文の漢委奴国王を(漢)倭奴国王と表記している。委奴国の委は、倭の人偏の省画であり、これは当時の漢式鏡銘でもよく見かけるものである。委(倭)奴は、『後漢書』の東夷列伝や光武帝紀に見えるから<sup>102)</sup>、金印が下賜された弥生時代の日本に委(倭)奴と称する国があったと考えられる<sup>103)</sup>。

建武中元二年、倭奴國奉貢朝賀，使人自稱大夫，倭國之極南界也。光武賜以印綬。（『後漢書』卷八十五、東夷列傳第七十五）

（中元）二年春正月辛未，初立北郊，祀后土。東夷倭奴國王遣使奉獻。（『後漢書』卷一下、光武帝紀第一下）

ところで、『広辞苑』は、委(倭)奴を、志賀島地方にあった小国家、と説明するが、果たしてそうなのであろうか。大や小という概念には主観の入る余地があるが、この小国家はどれくらい小さかったのであろうか。小国家という情報は、どこから入手したのであろうか。一方、『日本国語大辞典』は、朝貢した奴国に印綬を授けた、と説明するが、『後漢書』には、建武中元二年（57年）に貢ぎ物を奉げて挨拶にきた倭奴国(の使人)に印綬を授けた、とあり、奴国(の使人)に印綬を授けたのではない。根拠なしに、倭奴国を奴国と言い換えたり書き換えたりするのは、解析結果を誤る可能性があり、危険である。

情報解析では、解析対象が未知（或いは、ほとんど未知）である場合、解析担当者には通常以上の慎重さが求められる。解析対象を、真偽を確かめ(られ)ないまま軽々に言い換えたり書き換えたりすることは、解析結果を誤る可能性があり、慎まねばならない。担当者は、解析が可能かどうか、意味が取れるかどうか、という予想や判断にかかわりなく、朝貢し印綬を授けられたのは倭奴国、という認識を頭の片隅にきちんと置いて解析を行なうべきである。

『辞源』『字統』には、それぞれ次のような説明が見える。

倭 1. wēi 於爲切，平，支韻，影。

○説文：“順兒。从人，委聲。詩曰：‘周道倭遲。’” 參見“倭遲”。

2. wō 烏禾切，平，戈韻，影。

○古代對日本人的稱謂。漢書地理志下：“樂浪海中有倭人，分爲百餘國。”

注引魏略：“倭在帶方東南大海中，依山島爲國，度海千里。”

【倭<sub>2</sub>奴】古代日本的別稱。後漢書光武帝紀下：“中元二年春正月，……東夷倭奴國王遣使奉獻。”新唐書二二〇東夷傳日本：“日本，古倭奴也。……使者自言國近日所出，以爲名。”（『辞源』第一冊、p. 0234）

倭 形声 声符は委。委は稻魂を被って舞う女の形で、その姿の低くしなやかなさまをいう。〔説文〕<sup>八上</sup>に倭を「順ふ兒なり」とし、「詩に曰く、周道倭遲たり」と〔詩、小雅、四牡〕の句を引く。〔毛伝〕に「歴遠の貌なり」とあって、倭遲は疊韻の連語。倭遲はまた威夷・透遲などにも作る。委はもと田舞の状をいう字で、男が稻魂を被って舞うのは年、女を委といい、委声の字はその声義を承ける。わが国の古名として古く中国の史書にみえ、〔漢書、地理志、下〕に、「樂浪海中に倭人あり。分れて百餘國となる」、〔魏略〕に「倭は帶方東南の大海中に在り。山島に依りて國を爲す」「その舊語を聞くに、自ら太伯の後なりと謂ふ」などの語がある。〔後漢書、光武紀〕にみえる倭奴国も、その古名であろう。（『字統』p. 922）

この二書は、倭そのものは日本或いは日本人の意で、倭奴は日本の意とするが、一方、例えば、『学研新漢和大字典（普及版）』p. 117は、次のように説明する。

倭 《名》昔、中国で、日本および日本人をさしたことば。▷背が曲がってたけの低い小人の意。「倭夷<sup>ㄩ</sup>」「倭人在帶方東南大海之中＝倭人は帶方の東南大海の中に在り」〔三国志・魏書・倭人〕

【倭夷】<sup>ㄩ</sup> {倭奴}<sup>ㄩ</sup> 昔、中国人が日本人を卑しんでいったことば。▷「夷」は、昔の中国人が東方に住む異民族につけた呼び名。

『学研新漢和大字典（普及版）』は、倭は「背が曲がってたけの低い小人の意」とするが、ある民族で、人々がみなたけが低いことはありえても、人々がみな背が曲がっているというのは、ありうるのであろうか。藤堂明保、加納喜光両氏は、その情報をどこから入手したのであろうか。また、その情報は、信頼度の高い情報なのであろうか。藤堂、加納両氏は、説文で、倭は順うの意、とされていることを知っているはずである。『字統』によれば、委には、舞う女の姿の低いさま、の意があるが、それを援用したところで、低い姿勢を取れば、人々がみな背が曲がり小人になるわけではない。両氏は、恣意的に派生義や引伸義を創出したのであろうか。

『学研新漢和大字典（普及版）』は、さらに、倭奴は日本を意味するのではなく日本人を意味すること、それも「日本人を卑しんでいったことば」とするが、その説明が正

しければ、倭奴国は日本国ではなく日本人国となる。藤堂明保、加納喜光両氏は、倭奴の正確な意味がわからないまま、取り敢えず、文字面で判断したために（漢字の表意機能に頼るしかなかったために）、倭奴を倭夷と誤解しているようである<sup>104</sup>。

また、倭奴には、「ワド/わど」と読む可能性もあれば、「ワヌ/わぬ」と読む可能性もあるが、『学研新漢和大字典（普及版）』が「ワヌ/わぬ」を採らず、「ワド/わど」を採ったのには何か根拠があるのであろうか。

辞書の編纂では、他の辞書に引けを取るまい、と競合する辞書の内容はできるだけ取り込もうとする傾向が（少なくともかつては）あり、辞書は分厚くはなっても薄くなることはなかったが、藤堂明保、加納喜光両氏に、真偽や当否を検討することなく、そのように辞書を編纂した可能性はないのであろうか。想像でもっともらしく解説した可能性はないのであろうか。『学研新漢和大字典（普及版）』は、真偽不明なことを平然と記載している辞書の一例に過ぎないが、この問題については、後程詳しく検討したい（3-1. 委(倭)奴）。

「漢委(倭)奴国王」は、金印が鑄造された頃の人々には理解が難しい言葉ではなかったはずなのに、後世の人々には何故理解できなくなったのであろうか。後世の人々は、言語の面で、その頃の人々と同程度の知識がないために理解できない、という可能性があるが、如何であろうか。私たちを含め、後世の人々は、自分が想像するほど海の民のことを知らない可能性があるが、如何であろうか。「漢委(倭)奴国王」の五文字は、その一部がいわゆる海の民の言語であり、私たちを含め、後世の人々は、海の民の言語についての知識がないために、印文の意味が正確に理解できない、という可能性があるが、如何であろうか。

陸の民の私たちには、いわゆる海の民のことについて判断する能力や知識が欠けているかもしれないが、私たちの視点を、海の民の視点にもう少しでも近づけることができれば、解析対象を見極める能力や解析に必要な知識は、入手可能ではないだろうか。海の民の視点とは、具体的には、彼らが用いたであろう言語や文化についての知識ということになる。

小論では、管見に入った有用な知見を手掛かりに、必要にして十分な程度の、いわゆる海の民の言語や文化に関する知識を入手しつつ、言語学的視点から、金印「漢委奴国王」の読みと意味を探ってみたい。

## 2. 有用な知見

### 2-1. 枯野、軽野

解析の手掛かりは、いわゆる海の民が用いたであろう言語であるが、取り敢えず、船舶の名称について考察しつつ、解析に必要な知識（装備）を少しばかり入手しておきたい。

古代日本語における船舶の名称については、言語学的視点からの研究は貧弱で見るべきものがほとんどないが、僅かに二人の研究者が「枯野」船解明の過程で示した知見が有用と思われる。

先ず、茂在寅男氏は、人間は有史以前から驚くほどの広範囲にわたって航海や漂流によって移動していた、と考えている。その研究は、日本語の語彙にも及び、『古事記』や『日本書紀』が成立した頃は、ある種の高速度船を「カヌー」または「カノー」と呼んでいたのもので、その当て字として「枯野」（『古事記』）、「枯野、軽野」（『日本書紀』）が使われたのではないかと推論している<sup>201)</sup>。現在の「カヌー」という言葉は、コロンブスの航海以後にカリブ海の実住民から伝えられたアラワク語が元で、さらにその語源をたどると北太平洋環流に関係してくる、と言う。そして、『記』『紀』の中に古代ポリネシア語が多く混じっている、と述べ、様々な例を挙げるが、「枯野」については、具体的な手掛かりを示さなかった<sup>202)</sup>。その説は、重要な問題提起ではあったが、それ以上の知見が出てこなければ、面白い考えた、で終わってしまうものであった。

次いで、井上夢間氏は<sup>203)</sup>、「枯野」等の言葉とカヌーとの関係について、種々の事例を紹介しつつ、基本的で重要なことがらを次のように簡潔に説明している<sup>204)</sup>。

私も大筋としては同じ考えですが、茂在氏がいささか乱暴にこれらの語を一括して同一語とされているのに対し、私はこれらはそれぞれ異なった語で、ポリネシア語の中のハワイ語によって解釈が可能であると考えています。

カヌーは、一般的にはハワイ語で「ワア、WAA」と呼ばれます（ハワイ語よりも古い時期に原ポリネシア語から分かれて変化するとされるサモア語では「ヴァ、VA'A」、ハワイ語よりも新しい時期に原ポリネシア語から分かれたが、その後変化が停止したと考えられるマオリ語では「ワカ、WAKA」）。しかし、カヌーをその種類によって区別する場合には、それぞれ呼び方が異なります。

ハワイ語で、一つのアウトリガーをもったカヌーを「カウカヒ、KAUKAHI」

と呼び、双胴のカタマラン型のカヌーを「カウルア、KAULUA」（マオリ語では、タウルア、TAURUA）と呼びます。ハワイ語の「カヒ、KAHI」は「一つ」の意味、「ルア、LUA」は「二つ」の意味、「カウ、KAU」は「そこに在る、組み込まれている、停泊している」といった意味で、マオリ語のこれに相当する「タウ、TAU」の語には、「キチンとしている、美しい、恋人」といった意味が含まれていることからしますと、この語には「しっかりと作られた・可愛いやつ」といった語感があるのかも知れません。

これらのことからしますと、『古事記』等に出てくる「からの」または「からぬ」、「かるの」は、ハワイ語の

「カウ・ラ・ヌイ」

KAU-LA-NUI (kau = to place, to set, rest = canoe; la = sail; nui = large)、  
「大きな・帆をもつ・カヌー」

「カウルア・ヌイ」

KAULUA-NUI (kaulua = double canoe; nui = large)、  
「大きな・双胴のカヌー」  
の意味と解することができます。

また、「かのう」は、ハワイ語の

「カウ・ヌイ」

KAU-NUI (kau = to place, to set, rest = canoe; nui = large)、  
「大きな・カヌー」  
の意味と解することができます。

以上のように、記紀に出てくる言葉で日本語では合理的に解釈できない言葉が、ポリネシア語によって合理的に、実に正確に解釈することができるのです。

井上氏の知見は、従来不明であった事柄を言語学的に解明したもので、私たちの研究に突破口を開くものであった。氏の画期的な知見により、私たちは、言語学的な根拠を持って古代日本語における船舶の名称について考察することができるようになったのである。氏の知見が私たちの研究の新たな礎となることは、間違いない。ここに引用した知見は、古代日本語における船舶の名称の解明にとって極めて重要な視点/手掛かりであり、今後の研究に大きく寄与することであろう。

## 2-2. 『万葉集』の船

寺川真知夫氏が『万葉集』の一部の船について、次のように簡潔にまとめているので<sup>205)</sup>、井上氏の説くところを手掛かりにして、考察を加えておきたい。

……『万葉集』の巻二十に伊豆手夫禰（四三三六）、伊豆手乃船（四四六〇）と二例伊豆国産の船が詠まれており、奈良時代中期には大阪湾に回航され、使用されていたことが知られる。その船は伊豆手船すなわち伊豆風の船と呼ばれているから、熊野船（巻十二、三一七二）、真熊野之船（巻六、九四四）、真熊野之小船（巻六、一〇三三）、安之我良乎夫禰（巻十四、三三六七）などと同じく、何らかの外見上の特徴を有する船であつたに違いない。この四三六六の歌では「防人の堀江こぎつる伊豆手夫禰」とあるから、これを防人の輸送と解し得るなら、その特徴は大量輸送の可能な大型船ではなかったかと思われる。

以下、順を追って検討してみることにしよう。

まず、（四三三六）と（四四六〇）の歌は、次の通りである。

巻第二十（四三三六）<sup>206)</sup>

防人の 堀江漕ぎ出る 伊豆手船 梶取る間なく 恋は繁けむ

巻第二十（四四六〇）<sup>207)</sup>

堀江漕ぐ 伊豆手の舟の 梶つくめ 音しば立ちぬ 水脈速みかも

異文化の語彙（外来語）を取り入れる場合、大きく分けて音訳と意識の二つの方法がある。

中国語では、いずれも漢字で表記するが、音訳してみたもののこれではわかりにくい、と考えられる場合、さらに類名を加えてよりわかりやすくすることがある。特に、音節数が少ないものは、よりわかりやすく安定したものにするために、この手法を採ることが多い。

例えば、beer や card という単語は、「啤」や「卡」という訳で、一応、事足りており、特に単語の一部であれば、問題はない（例：扎啤、[ジョッキに入れた] 生ビー

ル；信用卡、クレジットカード)。ところが、「啤」や「卡」だけで一つの独立した単語となると、やはりわかりにくさは否めない。そこで、類名の「酒」や「片」を加えて、「啤酒」や「卡片」とするのである。

「異文化の語彙（外来語）＋類名」という、現代中国語に見られるこのような表記法は、古代日本語にも見られる。「手」や「手乃」という訳で、一応、事足りているが、よりわかりやすくするために、「夫祢」や「舟」という類名を加えて、「手夫祢」や「手乃舟」としたのである。

歌人が見たものは、いずれも全称が「手乃」と呼ばれた船と考えてよいであろう。表記の違いは、(四四六〇)では、全称の「手乃」をそのまま使うことができたが、(四三三六)では、音節数の制約により一音節少ない略称の「手」を用いた、ということから生じている。もちろん、逆に、(四三三六)で略称の「手」で詠まれた船は(四四六〇)では、音節数の制約を受けることなく「手」に「乃」を後置した全称の「手乃」で詠まれている、と見なしても一向に差し支えない。

いずれの見方をするにせよ、全称の「手乃」は二音節であり、一音節少ない略称にするには、前置要素「手」を略して後置要素「乃」を残すか、後置要素「乃」を略して前置要素「手」を残すか、の二つの選択肢しかない。全称の「手乃」と略称の「手」は、修飾語を被修飾語の後に置くという、表層の日本語には見られない語法構造の存在を示している。

ありふれた言説であるが、言語は多重構造である。

例えば、女性の名前に、菊乃(野)、雪乃(野)、幸乃(野)、綾乃(野)、等がある。名付け親は、女の子に付けるのにふさわしい名前、というくらいの意識や知識しかなく、乃(野)を付さない、菊、雪、幸、綾、等との違いは、わかっていないであろう。このことは、学者、研究者でも同じで、乃(野)の有無に意味の違いがあることは認識していないし、また認識できず、一文字多い/少ない、一音節多い/少ない、というくらいのことしか説明できないのではないだろうか<sup>208)</sup>。

人名の乃(野)は、古代日本語とポリネシア語とのつながりを示す言語的痕跡であるが、今日まで受け継がれており、心理の深層では過去の言語習慣(慣習)に基づく一種の「慣習法」が支配しているのではないかと、思わせる例である。

小島憲之、木下正俊、東野治之 1996 では、「手」の漢字に「て」のルビを振って「手」としているが、「手」は、「手」の正確な意味がわからないまま無難な訓みを取り



敢えず一つ当てただけ、という可能性はないのだろうか。慎重な解析では、歌人が「手」と詠んでいた可能性を排除することができない。「手」には、た行音の場合、「た」と「て」の二音があり、実際のところ、時代差や地域差さらには個人差により、「た」を書き記すのに用いられたり「て」を書き記すのに用いられたりしていた、と考えてよい。このケースでは、歌人が「た」と詠み「手」と書き記した可能性は、排除できるものではなく、むしろ高いのではないだろうか<sup>209)</sup>。

次は、(三一七二)、(九四四)、(一〇三三)の歌である。

卷第十二 (三一七二) <sup>210)</sup>

浦廻漕ぐ 熊野船着き めづらしく かけて俣はぬ 月も日もなし

卷第六 (〇九四四) <sup>211)</sup>

島隠り 我が漕ぎ来れば ともしかも 大和へ上る ま熊野の船

卷第六 (一〇三三) <sup>212)</sup>

御食つ国 志摩の海人ならし ま熊野の 小船こぶねに乗りて 沖辺漕ぐ見ゆ

(一〇三三)の「真熊野之小船」は、(三一七二)の「熊野舟」や(〇九四四)の「真熊野之船」とともに、ある同じタイプのことを指している、と考えられる。つまり、(一〇三三)の「小船」は、「小」という情報を明示しており、(〇九四四)の「船」と(三一七二)の「舟」は、音節数の制約により「小」を略してはいるが、(一〇三三)の「小船」と同じもの、と理解してよい。

最後は、(三三六七)の歌である。

卷十四 (三三六七) <sup>213)</sup>

百つ島 足柄あしな小舟 あるき多み 目こそ離るらめ 心は思へど

先の例と同じく、これらの単語も「異文化の語彙(外来語)+類名」という表記法で書き記されている。「小」や「乎」と訳して、一応、事足りているが、よりわかりやすくするために、「船」や「夫祢」という類名を加えて、「小船」や「乎夫祢」としたので

ある。

小島憲之、木下正俊、東野治之 1995a では、「真熊野之小船」の「小」に「を」のルビを振って「小<sup>を</sup>」とし、同 1995b では、「安之我良乎夫祢」の「乎」に「を」のルビを振って「乎<sup>を</sup>」としているが、「小<sup>を</sup>/乎<sup>を</sup>」は、海の民の言語や文化についての知識を欠くために、「小船」や「乎夫祢」の正確な意味がわからず<sup>214</sup>、取り敢えず接頭語か形容詞と見なして「を」の訓みを一つ当てただけ、という可能性はないのだろうか。慎重な解析では、歌人が「小<sup>を</sup>/乎<sup>を</sup>」と詠んでいた可能性を排除することができない。「小<sup>を</sup>/乎<sup>を</sup>」には、「を」と「こ」の二音があり、実際のところ、「を」を書き記すのに用いられたり「こ」を書き記すのに用いられたりしていた、と考えてよい。熊野の「小船」と足柄の「乎夫祢」は、ともに「こぶね」と詠まれたものを書き記した可能性があるのではないのだろうか。

歌人はある船を「を」と詠み「小<sup>を</sup>/乎<sup>を</sup>」と書き記した、と考えるのみでは、重大な事実誤認をする可能性がある。歌人がある船を「こ」と詠み「小<sup>を</sup>/乎<sup>を</sup>」と書き記した可能性は、排除できるものではなく、このケースではむしろ高いのではないだろうか。確かに、お遊戯、お散歩、や、おみかん、おりんご、のように、おふね、と言うことは可能ではあるが、歌でも会話と同じような頻度でそう詠むものなのか、使用頻度は男女とも同じなのか、話し手と聞き手の地位や年齢層による言い方や詠み方の違いはないのか、「おふね」以外にはどのようなケースがあるのか、などを考える必要性もあるのではないだろうか。

この文字表記から確実に言えることは、「小<sup>を</sup>/乎<sup>を</sup>」は「を」もしくは「こ」を書き記した（「を」もしくは「こ」の音声を示している）ということだけである。「小<sup>を</sup>/乎<sup>を</sup>」の訓みは「を」一音しかない、と考えるのは、無邪気に過ぎるが、「小<sup>を</sup>/乎<sup>を</sup>」は、考え得る訓みの一つであるのみならず、古代日本語における船舶名称を研究する上で極めて重要な意味を持っている。学者であれ研究者であれ、古代日本語の中に「こぶね」（或いは「こ」と呼ばれた船が存在した可能性がありそうだ、という認識を頭の片隅に置くとよい。

このケースでは、歌人は「小」や「乎」を表音に用いたのであり、表意に用いたのではない、と考えてよい。（三三六七）の原文のように、「乎夫祢」と表記されていれば、字面から舟/船の大きさを連想することはない。ところが、「小舟」と表記されていると、当て字に過ぎないということがわかっていけばよいが、人々が、つい、字形に引かれて、

単に「サイズが小さい船」と取ってしまったても無理はない。語感の極めて鋭い一部の人が腑に落ちないと思うことがあっても、漢字の絶大な表意力の前に、「小」と書いてあるから小さいと考えるしかない、と不審の思いを喪失してしまうのである。

それでは、「手」「手乃」と「小/乎」は、いずれも船を意味する異文化の語彙（外来語）を音訳したもの（書き記したもの）ということになるが、一体どのような言葉に由来するのであろうか。先に引用した井上氏の知見から推測すれば、「手」は「tau」を、「手乃」は「tau-nui」を、そして、「小/乎」は「kau」を書き記したものであろう。

大型のカヌーと言いたければ、確かに、「手乃（tau-nui）」が正確な表現である。しかし、実際には、寺川真知夫 1980 が、大量輸送の可能な大型船ではなかったか、と推測するように（p.142）、（四三三六）の「手（tau）」は（四四六〇）の「手乃（tau-nui）」と同じ大型船を意味しており、大きいことを明言する場合を除き、「手（tau）」だけでカヌー一般を指したはずである。それは、今日、カヌーという言葉が大小を問わずに使えるのと同じような状況である。このことは、「小/乎（kau）」についても同様であった、と考えられる。

言語現象として、伊豆では「手、tau」が使われ、熊野や足柄では「小/乎、kau」が使われていることは、注目に値する。それは、伊豆にはカヌーを「手、tau」と呼ぶ人々が、そして、熊野や足柄にはカヌーを「小/乎、kau」と呼ぶ人々がいたことを示しているからである。

これで、古代の日本の船舶には、後置修飾語の「nui、野/乃」を付す大型のもの（kaulua-nui、加良奴/加良怒/枯野/軽野；kau-nui、狩野<sup>215)</sup>；tau-nui、手乃<sup>216)</sup>）と、後置修飾語の「nui、野/乃」を付さず、大型のものから小型のものまで幅広く使用できるもの（tau、手；kau、小/乎）があったことがわかる。

### 3. 漢委奴国王

#### 3-1. 委(倭)奴

委(倭)奴の読み方には諸説ある。

『国宝事典 新增補改訂版』の「考古 金印<sup>きんいん</sup>」の項では「その訓みについてはなお定説をみない」とし<sup>301)</sup>、『日本大百科全書』の「金印」の項は、次のように説明している<sup>302)</sup>。

読み方には諸説あるが、……一八九二年（明治二五）三宅米吉<sup>みやけよねきち</sup>により「漢<sup>かん</sup>の委<sup>わ</sup>（倭<sup>な</sup>）の奴<sup>な</sup>の国王<sup>なのあがた</sup>」と読まれ、奴を古代の儼県、いまの那珂郡に比定されて以来この説が有力である。〈井上幹夫〉

しかしながら、「漢委奴国王」をこのように読む（「漢の委の奴の国王」と三段に区切る読み方をする）のは、間違いである。

中国古代の印文は、「授与する側+授与される側」の二段に区切る読み方をする。金印の下賜は、与える側（漢）と与えられる側（委（倭）奴）の二者の直接の統属関係を示すものであり、AのBのCという三段服属の関係を示さない。金印の印文は、解析が可能かどうか、という予想や判断にかかわりなく、「漢の委奴の国王」と二段に区切って読むしかないのである。

三段に区切る読み方は、採用するわけにはいかないが、三宅米吉も、二段に区切る読み方で解釈できるものなら、そうしたかったのではないか。三宅説は、基礎の部分で認識に誤りがあり、信用性はほとんどないに等しい。そのため、今日なお、異説が唱えられ、それは、今後も幾度となく繰り返されることであろう。

多くの学者・研究者が二段に区切る読み方を提唱しているが、今春発表された論文に、大谷光男 2011<sup>303</sup>がある。大谷氏は『後漢書』から皇帝が周辺の蛮夷に授けた金印紫綬の史料 7 例を再検討し「後漢の皇帝が蛮夷諸国に授けた金印紫綬は、一国<sup>國</sup>に授け、国内の一部族（国）に授けられることはなかった。したがって、問題の金印「漢委奴国王」の読み方で、「カンのワのナのクオオウ」と訓む三宅説は退けられることになる」と結論付けている（pp. 12-14）。

ただ、遺憾ながら、大谷氏は「金印紫綬は銀印青綬、銅印墨綬と異って、一国の王に授けるのであって、倭奴国が倭国を代表したことになる。よって金印の「委奴国」を記紀と照合すれば、中国の古代音韻論とは矛盾があろうが、「ヤマトの国」と読まざるをえないのではあるまいか」と述べている（p. 15）。氏の、漢字音を解さず、言葉に対する常識をも欠いた説明はあまりにも乱暴であるが、古代、現代にかかわらず、委（倭）奴という漢字を見せられてヤマトと読む中国人はいないのである。

現時点において、二段に区切る読み方（AのBC、漢の委（倭）奴）を採る者であれ、三段に区切る読み方（AのBのC、漢の委（倭）の奴）を採る者であれ、委（倭）奴の意味は、まだ正確にわかったわけではなからう。

難問も、これほどのものになると、ごまかしが露見しにくい。そうすると、委(倭)奴を訓むくらいであれば、さして難しくないことにもなる。委(倭)を「ワ/わ」と読み、奴を「ド/ど」か「ヌ/ぬ」のいずれかに読み、後はもっともらしい説明でもしておけばよい、という発想になりかねない。

先にも触れたが、情報解析では、解析対象が未知（或いは、ほぼ未知）である場合、解析担当者には通常以上の慎重さが求められる。私たちは、解析が可能かどうか、意味が取れるかどうか、という予想や判断にかかわりなく、二段に区切る読み方（AのBC、漢の委(倭)奴）を出発点にし、朝貢し印綬を授けられたのは委(倭)奴国、という認識を持って解析を行なうしかない。これで解析できなかった場合は、三段に区切る読み方（AのBのC、漢の委(倭)の奴）に転向するのではなく、pending（未決、保留）とし、後日再挑戦するしかないのである（三段に区切る読み方で試行的に解析することは否定しない）。

中国側が日本を委(倭)と呼んだ（名付けた）というのは、誤解である。

委(倭)奴は、倭人(委(倭)奴国の使人)が提供した「ワ/わ+α」という音声情報を中国の史官が文字情報に変換したもの、と考えるべきである。変換の過程においては、極めて高度な漢字の知識を持つ者が聴取・記録を担当しており、提供された音声情報を忠実に反映する漢字が選ばれたものと考えられる。また、表記を確定する前に、選ばれた漢字が提供された音声を正しく反映しているか、確認の過程があったろうことは想像に難くない。

従って、倭人(委(倭)奴国の使人)が提供した音声情報「α」は、当然のことながら、「ナ/な」である可能性はほとんどない。なぜなら、仮に、倭人(委(倭)奴国の使人)が提供した音声情報が「ナ/な」であったならば、聴取・記録担当者は、「ナ/な」という音声情報を伝達するのに最も相応しい漢字（例えば、奈、那）を用いて記録したことであろう。言い換えれば、倭人(委(倭)奴国の使人)が提供した音声情報が「ナ/な」であったならば、聴取・記録担当者の選択肢の中に「奴」という漢字が存在する可能性はほぼない、と考えてよい。

中国の史官には、極めて高度な漢字の知識があり、提供された音声情報がたとえ「ナ/な」であったとしても、それを「奴」という文字情報に変換することは、ほぼありえず、倭人(委(倭)奴国の使人)の提供した音声情報も「ナ/な」ではなかったと考えてよ

い。

「奴」は、倭人(委(倭)奴国の使人)の提供した「ド/ど、或いは、ヌ/ぬ」という音声情報を文字情報に変換した表記である。私たちには、「奴」を「ナ/な」と読む選択肢はないし、解析が可能かどうか、意味が取れるかどうか、という予想や判断にかかわりなく、「奴」は「ド/ど、或いは、ヌ/ぬ」を示している、という認識で解析せざるをえないのである。

先程、倭人(委(倭)奴国の使人)が提供した音声情報が「ナ/な」であったならば、聴取・記録担当者の選択肢の中に「奴」という漢字が存在する可能性はほぼない、と述べたが、ほぼ、と言うのは、『学研新漢和大字典(普及版)』p.426が、上古音として、**nag**、を挙げているからである<sup>304)</sup>。三宅米吉が奴を「ナ/な」と読むことで、古代の儼な県、今の那珂郡に比定し、後に藤堂明保、加納喜光両氏の再構する上古音と一致するのは偶然であった。奴が「ナ/な」を書き記したものではないことは、後でも触れるが、三宅米吉は、どうしても「ナ」に読みたいたのであれば、三段に区切って「ワのナ」と読むのではなく、二段に区切って「ワナ」と読むべきであった<sup>305)</sup>。

次に、中国人が日本を蔑視したものとする向きがあるが、その見方は正しいのであろうか。ここで、『新字源』『広辞苑』の記述を見ておきたい。

『新字源』【倭人】わん むかし、中国人が日本人をよんだよび方。

【倭奴】わど むかし、中国人が日本人をいやしめていったよび名。

『広辞苑』わ-じん【倭人・和人】中国人が日本人を呼んだ古称。

わ-ど【倭奴】[新唐書東夷伝、日本] 古代中国人が日本人を称した語。→倭奴国わどこく

わ-ぬ【倭奴】⇒わど

『新字源』『広辞苑』ともに、倭人(和人)を、むかし、中国人が日本人をよんだよび方/古称、とするが、この説明が間違いであることは既に述べた。委(倭)奴は、倭人(委(倭)奴国の使人)が提供した「ワ/わ+α」という音声情報を中国の史官が文字情報に変換したもの、と考えるべきである。

『新字源』は、倭奴を「わど」一読としているが、奴の字音は、ド(漢)、ヌ(呉)の二音であり(p.251)、根拠もなく、倭奴は「ワド/わど」一音である、と断定するこ

とはできない。一方、『広辞苑』は、倭奴を「わど」「わぬ」とするものの、倭奴国を「わどこく」一読としている。また、『広辞苑』は、倭奴を、古代中国人が日本人を称した語、と奴の字面に囚われて間違った説明をしており、『新字源』はさらに、「むかし、中国人が日本人をいやしめていったよび名」と間違いに輪をかけた説明をしている。要するに、『新字源』『広辞苑』とも、倭奴の意味が正確に取れていないのである。小川環樹、西田太一郎、赤塚忠諸氏、新村出氏は、そのような情報をどこから入手したのであろうか。その情報の信頼度は検討されたのであろうか。

漢字は、形音義の三要素からなるが、表意文字に分類されるように、表意力が強いいため、漢字を理解できる者が、漢字の字形が示唆する意味に囚われずに情報を解析することは、一般に、容易ではない。この問題もそうだが、漢字が表音に用いられている（ことを見抜かねばならない）ケースでも、字形が示唆する意味で解け（た気分になれ）れば、思考がそこで停止する。このような経験は、意識するしないにかかわらず、恐らく誰もが持っているであろう。その結果、漢字表記が行われる以前の日本語の実相を見誤ることが少なからず生じるのである。

後置修飾語が普通に使われているうちは、「委(倭)奴」の構造がわかり、意味が取れるため、何ら問題がなかったが、後置修飾語が使われなくなると、「委(倭)奴」の構造がわからず、意味が取れなくなり、字面のみに依拠して意味を取ろうとしたために、「奴」に蔑みの意味があるのではないかと考えるようになったものと考えられる。根拠なく、ただ、こうだ、こうだろう、と言うのは、付会の域を出ないもの、と見られかねない。倭という字にたけの低い意味があるというのも、本人（或いは、その家族や親族）の背が低かったから、という可能性はないのであろうか。

冒頭（1. はじめに）で例示したが、『学研新漢和大字典（普及版）』は、「倭奴」の正確な意味を理解しないまま「ワド」の読みを当て、「昔、中国人が日本人を卑しんでいったことば」と誤った説明をしている。卑しみの意があるかどうか、という点では、奴隸（どれい）や奴婢（ぬひ、どひ）という単語があるから、「ワド/わど」「ワヌ/わぬ」とも同じである。また、『学研新漢和大字典（普及版）』は、真偽不明なことを平然と記載している辞書の一例に過ぎない、と述べたが、『新字源』『広辞苑』もその例に挙げられることは、ご理解いただけよう<sup>306)</sup>。

また、「倭奴」には、「ワド/わど」と読む可能性もあれば、「ワヌ/わぬ」と読む可能

性もあるが、『学研新漢和大字典（普及版）』が「ワヌ/わぬ」を採らず、「ワド/わど」を採ったのには何か根拠があるのか、と疑問を呈した。藤堂明保、加納喜光両氏は、根拠もなく、倭奴は「ワド/わど」一音である、と断定するべきではなかった。

例があるとわかりやすいが、例えば、黄という漢字には、オウ、コウの二読があり、可能性だけを言えば、例えば、黄麻、黄金、黄河は、それぞれ、オウマ、コウマ、オウゴン、コウゴン、オウガ、コウガに読めるものの、実際には、黄麻は二読あっても、黄金、黄河は一読しかない。何故その一音に読むのか（黄金、黄河は、何故、オウゴン、コウガに読み、コウゴン、オウガに読まないのか）、という問いには、恐らく習慣であろう、としか説明できないのではないだろうか。

委(倭)奴には、一読（「ワド/わど」「ワヌ/わぬ」のいずれか）と二読（「ワド/わど」「ワヌ/わぬ」の両者）の可能性があるが、忘れ去られた単語であるため（但し、単語そのものは忘れ去られたものの、単語の持つ意味や概念は、気付かれてはいないが、健在である）、一読だったと仮定しても、「ワド/わど」「ワヌ/わぬ」のいずれであったか、さえもわからない。委(倭)奴の意味がわからず、当時の読みの習慣もわからないからである。

押し付けられた呼称は、捨てる自由があれば、捨てればよい。特に、それが気に入らないものなら、なおのこと、さっさと捨てればよい。捨てる自由がなければ、無視して使わないくらいのことではしてもよいのではないか。捨てなければ捨てられるにもかかわらず、気に入らないのにその素振りも見せずに「押し付けられた気に入らない蔑称」なるものを使い続けるほど日本人は柔<sup>やわ</sup>ではなからう。

和は、委(倭)を書き改めたものであるが、こちらはどのように考えればよいのであろうか。意識するしないにかかわらず、「押し付けられた気に入らない蔑称」なるものが定着してしまったために変更するのもままならず、やむなく委(倭)を表記上だけ和に書き改めて言葉そのものは引き続き使用している、という見方をすることになるが、それで果たして正しいのであろうか。

委(倭)は「押し付けられた気に入らない蔑称」という言説を口にしながらも、その「蔑称」なるもの（の表記改良形式、和）を至る所で胸を張って使い続ける者は、自己の論理や言動の矛盾に気付く必要がある。

委(倭)奴は、上述の通り、自分たちのことを「ワ/わ+α」と称した人々が提供した音声情報を文字情報に変換したもの（漢字で表記したもの）、と見てよい。中国人がそ



れらの人々を委(倭)奴と呼んだり名付けたりしたから、その人たちが自分たちのことを委(倭)奴と言うようになったわけではないのである。

そして、和は、委(倭)と表記された単語の表記を書き改めたものではあるが、表記の元になった単語(概念)は、日本人自身が使用していた「ワ/わ」という呼称であり、日本人は、その呼称を引き続き使用しているに過ぎない、と見るのが正しい。

ワ/わ/委/倭/和は、「押し付けられた気に入らない蔑称」などではなく、日本人が元から使用している由緒ある呼称であり、胸を張って使えばよい。

くどいようだが、長年の広範囲に亘る誤解があるので、「倭」という表記ができる過程を再確認しておきたい。古代日本人は文字を知らなかったために、文字の選定は中国人に任されたが、「ワ/わ」という音声情報は、日本人が中国人に提供したものであり、中国人が音声情報をも日本人に提示したものではない、ということである。そして、中国人は、提供された音声情報に合致する文字を選定したが、選定の基準は、恐らく、提供された音声に忠実かどうか、であり、表記を確定する前に、選定された漢字が音声を正しく反映しているか、確認の過程があったことは想像に難くない、ということである<sup>307)</sup>。

### 3-2. 加良奴(加良怒)

委(倭)奴を卑字と見る向きもあるが、その見方は正しいのか、委(倭)奴はやむをえない選択の結果ではないのか、は一考の余地があつてよいであろう。

漢詩は、作法上、漢字を平と仄に区別し、韻律に基いて配列する。そのきまりは複雑なため、一般に書物で確認しながら作詩するが、最低限守らねばならない規則に、二四不同、二六対、というものがある。二四不同、二六対とは、それぞれ、二字目と四字目の平仄を違える、二字目と六字目の平仄を揃える、という意味である。五言の場合、二四不同、という約束を守ればよい。

かつて、辻本春彦先生は、授業で、唐の詩人李白の秋浦歌(白髪三千丈、縁愁似箇長、不知明鏡裏、何處得秋霜)を取り上げて次のようなことを言われたことがあつた。

一丈は、三メートルであり、三千丈は、九千メートル、九キロメートルである。髪を切らなければそこまで長くなるかもしれないが、普通に日常生活ができるはずはない。中国人は何と大袈裟な民族なのか、と日本人は考えているが、李白は大袈

婆な中国人だから三千丈と詠った、と考えてよいのであろうか。

この詩の二字目と四字目の平仄は、以下の通りである（平は○、仄は×で示す。以下同じ）。

白<sup>×</sup>髮<sup>○</sup>三<sup>○</sup>千<sup>○</sup>丈<sup>○</sup> 縁<sup>○</sup>愁<sup>○</sup>似<sup>×</sup>箇<sup>×</sup>長<sup>×</sup> 不<sup>○</sup>知<sup>○</sup>明<sup>×</sup>鏡<sup>×</sup>裏<sup>×</sup> 何<sup>×</sup>處<sup>○</sup>得<sup>○</sup>秋<sup>○</sup>霜<sup>○</sup>

また、基本数字（便宜上、十は重複して扱う）、単位数字の平仄は、以下の通りである。

一<sup>×</sup>、二<sup>×</sup>、三<sup>○</sup>、四<sup>×</sup>、五<sup>×</sup>、六<sup>×</sup>、七<sup>×</sup>、八<sup>×</sup>、九<sup>×</sup>、十<sup>×</sup>  
十<sup>×</sup>、百<sup>○</sup>、千<sup>×</sup>、万<sup>×</sup>、億<sup>×</sup>

髪<sup>○</sup>の長さを短くしたくても、平仄の規則を守る限り、李白には、三十丈、三百丈の選択肢はなかったのである<sup>308)</sup>。

白髮三千丈の千は、やむをえない選択の一例であるが、ここで、仁徳天皇がある船を詠んだ歌を見ておきたい。ある船とは、今日、通常、枯野(船)と呼ばれる船で、『古事記』（下巻、仁徳天皇）の原文表記は、加良奴（荻原浅男、鴻巣隼雄 1973. p. 289）、加良怒（山口佳紀、神野志隆光 1997. p. 304）である<sup>309)</sup>。

加良<sup>●</sup>奴<sup>●</sup>袁<sup>●</sup> から<sup>●</sup>の<sup>●</sup>を<sup>●</sup> (枯野を)<sup>310)</sup>  
志<sup>●</sup>本<sup>●</sup>爾<sup>●</sup>夜<sup>●</sup>岐<sup>●</sup> しほ<sup>●</sup>に<sup>●</sup>や<sup>●</sup>き<sup>●</sup> (塩に焼き)  
斯<sup>●</sup>賀<sup>●</sup>阿<sup>●</sup>麻<sup>●</sup>理<sup>●</sup> し<sup>●</sup>が<sup>●</sup>あ<sup>●</sup>ま<sup>●</sup>り<sup>●</sup> (其が余り)  
許<sup>●</sup>登<sup>●</sup>爾<sup>●</sup>都<sup>●</sup>久<sup>●</sup>理<sup>●</sup> こ<sup>●</sup>と<sup>●</sup>に<sup>●</sup>つ<sup>●</sup>く<sup>●</sup>り<sup>●</sup> (琴に作り)  
賀<sup>●</sup>岐<sup>●</sup>比<sup>●</sup>久<sup>●</sup>夜<sup>●</sup> か<sup>●</sup>き<sup>●</sup>ひ<sup>●</sup>く<sup>●</sup>や<sup>●</sup> (かき弾くや)  
由<sup>●</sup>良<sup>●</sup>能<sup>●</sup>斗<sup>●</sup>能<sup>●</sup> ゆ<sup>●</sup>ら<sup>●</sup>の<sup>●</sup>と<sup>●</sup>の<sup>●</sup> (由良の門の)  
斗<sup>●</sup>那<sup>●</sup>賀<sup>●</sup>能<sup>●</sup>伊<sup>●</sup>久<sup>●</sup>理<sup>●</sup>爾<sup>●</sup> と<sup>●</sup>な<sup>●</sup>か<sup>●</sup>の<sup>●</sup>い<sup>●</sup>く<sup>●</sup>り<sup>●</sup>に<sup>●</sup> (門中の海石に)  
布<sup>●</sup>礼<sup>●</sup>多<sup>●</sup>都<sup>●</sup> ふ<sup>●</sup>れ<sup>●</sup>た<sup>●</sup>つ<sup>●</sup> (触れ立つ)  
那<sup>●</sup>豆<sup>●</sup>能<sup>●</sup>紀<sup>●</sup>能<sup>●</sup> な<sup>●</sup>づ<sup>●</sup>の<sup>●</sup>き<sup>●</sup>の<sup>●</sup> (浸漬の木の)  
佐<sup>●</sup>夜<sup>●</sup>佐<sup>●</sup>夜<sup>●</sup> さ<sup>●</sup>や<sup>●</sup>さ<sup>●</sup>や<sup>●</sup> (さやさや) [荻原浅男、鴻巣隼雄 1973. p. 289]

同一の文書内では、一般に、同一の音声は同一の文字で書き記される。言い換えれば、同一の文書内では、同一の音声を異なる文字で書き記すことはない、と考えてよい。

奴は「ノ/の」とも読めるが、この歌の中では、能を「ノ/の」と読んでいるので（「ノ/の」という音声情報は能という文字情報で書き記されているので）、奴は「ヌ/ぬ」という音声情報を書き記したもの、と考えた方がよかろう<sup>311</sup>。逆に、奴は「ノ/の」という音声情報を書き記したもの、と誤解すると、「ヌ/ぬ」を表記する文字（漢字）がなくなってしまう。また、解析の精度を確保するには、枯野と書き換えたものではなく、原文の加良奴（加良怒）のままの漢字表記に基づいて解析した方がよい。

加良奴（加良怒）は、「からぬ/カラヌ」という音声情報を書き記したもの、と考えた方がよかろう。漢委奴国王における委奴という表記は、当時の聴取・記録担当者には最高の選択肢だった、と考えてよいのではないか。

上述したが、情報解析では、解析対象が未知（或いは、ほとんど未知）である場合、解析担当者には通常以上の慎重さが求められる。解析対象を、真偽を確かめ（られ）ないまま軽々に言い換えたり書き換えたりすることは、解析結果を誤る可能性があり、慎まねばならない。担当者は、解析が可能かどうか、意味が取れるかどうか、という予想や判断にかかわりなく、歌に詠まれたのは加良奴（加良怒）、という情報に基づいて解析を行なうべきである。

異文化の語彙（外来語）は、元の表記をそのまま採用しない限り、新たな表記をする際に揺れが生じやすい。日本語を例にとると、通信手段の発達した今日でさえ、全国的にレポートやリポートの揺れがある。関西でへレと言う肉は、関東ではヒレと言うことが多いと聞く。また、一部のレストランでは、フィレとも言っている。「奴」と「怒」の揺れは、元の表記をそのまま採用しなかった（或いは、できなかった）ために生じている。『記』『紀』がそうしなかった（或いは、できなかった）のは、その単語が漢字以外の文字で表記されていたか、文字表記そのものがなかったか、のどちらかである。

『記』『紀』の編纂者は、語部（集団）の提供する情報を淵博な知識で記録・編集したが、海の民の言語や文化に関する知識は、その後、急速に失われ、後世の人々は、同じ知識を共有しないため、書かれたことすら理解できない。周辺諸語の知識（装備）なしに、いわゆる日本語一視点の知識（装備）のみで、このような語彙に立ち向かうものではない。

### 3-3. 正確な読解

さて、読めるとは何であろうか。正しい音声で読み、意味が正しく取れる、ということである。例えば、

There were three houses on the top of the mountain.

は、houses を[hauziz]と読みを間違えても、意味は正しく取れよう。しかし、  
前面有家食堂。

は、一字一句を正確に読んでも、前にファミリーレストランがある、と解釈するなら、意味は取れていないことになる。

三宅米吉説は、定説としてほぼ定着したようであるが、残念なことに、この説は、委(倭)奴を読めてもいないし、意味も取れていない。

諸氏は、漢委奴国王をどの程度正確に読解しているのだろうか。

諸氏の手法は、何とか何かに結び付けられる読みがあればその読みを採用する、というものであるが、「委(倭)奴」の意味が正しく取れていない、という点は共通している。そのことは、諸氏自身が薄々気付いていようし、諸氏の説を見聞きする者も薄々気付いていよう。いかなる学者、研究者であれ、pending (未決、保留) や後進に委ねる、という選択肢は、あつてしかるべきである。

漢委奴国王は、二段に区切って読むのが正しく、三段に区切って読むのは間違いであり、解析が不可能に見えても、漢委奴国王を例外に扱うことはできない。また、「奴」の読みも「ド」「ヌ」のいずれか、と考えるべきである。三段に区切る読みを出発点とする三宅説は、言わば宿痾に苦しむかのように、今後も幾度となくその欠陥に苦しみ続けるであろう。

私たちは、解析に必要な知識(装備)を入手してきたが、そろそろ、委(倭)奴や奴が何を意味するのか、委(倭)奴や奴は当時の人々が何と言っていた単語を書き記したものであるのか、が理解できるようになったのではないだろうか。

委(倭)奴は、日本人が当時普通に使用していた語彙を漢字で表記したもの、と見てよいが、ここで、後置修飾語の例を少し見ておきたい。

フランス語の Mont Blanc は、前置修飾語で言うなら、英語の white mountain に相当しようし、英語には、There is something noble about him. や a friend in need is a friend indeed のような後置修飾表現もある。中国語の共通語では、おんどり、めんどり、を、公鶏、母鶏、と言うが、南方方言では、後置修飾表現で、鶏公、鶏母、と言う。

日本語では、先に例示した(2-2.『万葉集』の船)、手乃(tau-nui、手-大きい、大きな手、大型のtau。tauは、地域により、田、多と書かれることもある)、加良奴/加良怒、枯野、軽野(kaulua-nui、加良/枯/軽-大きい、大きな加良/枯/軽、大型のkaulua)の例がある。なお、kauluaは、唐と書かれることもある<sup>312)</sup>。

人名の、彦火火出見尊は、後置修飾表現の「彦-火火出見」と、前置修飾表現の「火出見-尊」とが混在して用いられる社会で生まれたハイブリッド表現である。

異文化の語彙(外来語)は、異文化の語彙(外来語)の知識がなければ、正確に理解できない。例えば、「母はほっとにした」という文章は、一部に異文化の語彙(外来語)が用いられていることを知らなければ、間違った文章、手直しの必要な文章と誤解してしまう<sup>313)</sup>。また、例えば“請給我手紙”という中国語は、日本語の知識だけでは正確に理解することができないし、逆に「油断一秒、怪我一生」という日本語は、中国語の知識で何の不自由もなく理解できるが、その理解は日本語の意味とは全くズレたものとなる<sup>314)</sup>。

「倭奴」は、「ワ/わ-nui」を書き記したもので、「ワヌ/わぬ」と読み、「倭-大きい」(大きな倭、偉大なる倭)を意味する、と解釈するのが正しい<sup>315)</sup>。前置修飾表現が全国を覆うようになると、倭奴が後置修飾表現であることすら理解できなくなってしまうが、「倭」に「奴」を後置する「倭奴」は、「倭(や和)」に「大」を前置する「大倭(や大和)」の前身形であり、意味も全く同じなのである。

奴は、nuiという音声情報を正確に反映する文字として、当時の中国側(そして後の日本側)の聴取・記録担当者には最高の選択肢だった、と考えてよい。しかしながら、後置修飾語が用いられなくなると、人々は、奴(nui)の意味(大きい)・用法(後置修飾語)が理解できず、奴を字面のみで判断し(漢字の表意機能のみに着目し)、卑字ではないか、卑しめの意味があるのではないかと誤解してしまった。もうおわかりであろうが、奴は、卑字などでは決してなく、あらぬ濡れ衣を着せられた悲劇の好字であった<sup>316)</sup>。

金印は、その印文が示す通り、漢が倭奴国王に与えた印綬である。かつて倭(倭)奴国は日本を象徴する存在であった。元々シンプルな表記で普通に理解できた(はず)にもかかわらず、後世の人々が倭(倭)奴を理解できなくなったことは、国情の変遷を考える上で示唆的である。日本を代表する国家が後置修飾語を使用し、日本語の基層に後置修飾語の層が存在するのである。

私たちは、漢委奴国王に、日本が経てきた歴史を垣間見ることができる。金印「漢委奴国王」は、委(倭)奴国があったことを私たちに教えてくれている。「首都大学東京」という名称は、日本人の心理の深層に今なお曖昧に受け継がれている後置修飾表現の例と考えられる。

日本社会は、後置修飾表現を使用する社会から前置修飾表現を使用する社会へと変わり、倭奴という言い方も大倭(後に、大和)へと変わったのである。

#### 4. おわりに

冒頭で(1. はじめに)、私たちを含め、後世の人々は、自分が想像するほど海の民のことを知らない可能性がある、と述べたが、実際のところ、私たちは、無知とも言えるほどに海の民のことを知らない。

金印「漢委奴国王」は、数多くの人々がその考察考証に携わってきたが、未だに決定打がない。私たちを含め、後世の人々は、海の民の言語や文化についての知識を継承しなかったため、委(倭)奴の意味を取ることすらできない。適切な海の民の言語や文化についての知識を欠いたままでは、当然ながら、海の民の言語や文化を適切に理解したり説明することができないのである。

私たちは、先人と同じように漢委奴国王を解析対象としながら、新たに、海の民が用いたであろう言語や文化の知識、という装備を持つことで、先人が持たなかった視点を持ち、先人が理解できなかったことが理解できるようになった。逆に言えば、仮に、私たちに、海の民が用いたであろう言語や文化の知識(装備)がなければ、先人と似たようなこと、言い換えれば、奴の意味がわからないまま、第三者からは、牽強附会、と思われかねないようなことしか書けなかったものと思われる。今日の日本語の中に異文化の語彙(外来語)が存在するように、古代の日本語の中にも異文化の語彙(外来語)が存在することが、おわかりいただけたであろう。どの言語にも共通するが、日本語も、一層ではなく、多層なのである。海の民の言語や文化は、日本の言語や文化の基層の一部なのである。古代の日本社会には多様な言語や文化があったこと、即ち、古代の日本社会における言語や文化の多層性は、是非とも視野に入れておきたいものである。

海の民の視点、具体的には、海の民が用いたであろう言語や文化の知識を加えることで、古典の理解や解釈が、より豊かに、より正確になる。私たちは、古代の日本語に取り組むのに、いわゆる日本語の知識にせいぜい中国語や朝鮮語の知識を加えただけのよ

うな姿勢でやってきたが、ポリネシア語が解析/研究上考慮すべき言語であることを否定できないことがはっきりしたのである。学者や研究者は、政治家ではないのだから、外来語は想定外だった、と平然と無責任なことを言うのは、やめておきたいものである。

小論では、先達の知見を手掛かりに、さらに、海の民が用いたであろう言語や文化の知識を入手することで、私たちの視点を海の民の視点に少しでも近づけ、「奴」は nui(大) という音声情報 (意味情報を含む) を漢字で書き記したもので「奴」と読むこと、「委(倭)奴」は「委(倭)-奴」の意味構造であること、修飾語は、前置するか後置するかのいずれかしかないが、後置修飾語「奴」を用いれば「ワ/わ-奴」となる単語は、同義の前置修飾語「大」を用いれば「大-ワ/わ」となること、などを解明することができた。

小論は、これまで持つことのなかった、異文化の語彙(外来語)という視点を加えることで幾つかの問題を解くことができた。古代日本語の問題をより正確に解いたり、古典をより正確に理解するのに、外国語、特にポリネシア語等の周辺諸語の知識や、船舶・航海の知識が役に立つという認識は、やがて常識となるのではないか。

## 注

101) 「銅」を「同」、「和」を「禾」とする類である。「委」は「倭」の略字と解釈する必要はなく、当時は使用法に互換性があったと見てよからう。

102) 建武中元は、後漢、光武帝の年号、その二年は、西暦 57 年。

『隋書』には、『後漢書』が記す 57 年の朝貢に加え、107 年の朝貢が記されている。漢光武時、遣使入朝、自稱大夫。安帝時、又遣使朝貢、謂之倭奴國。(『隋書』卷八十一、列傳第四十六、東夷、倭國。[唐] 魏徵、令狐德棻撰、中華書局、1973 年、p. 1825)

103) 委(倭)奴国の実態 (具体的な版図や規模等) は、未詳ながら、日本側のリーダー格と見なされていたことは間違いない。

104) 夷が当初から蔑称であったかどうかについては、少なからず疑問が残る。ただ時代が下がるにつれて、夷は卑字となり、同時に蔑称となっていく可能性はあろう。

201) 『古事記』(下巻、仁徳天皇)の原文表記は、加良奴(荻原浅男、鴻巣隼雄 1973. p. 289)、加良怒(山口佳紀、神野志隆光 1997. p. 304)。

202) 茂在寅男 1984. p. 32。

「枯野」等の解釈に外来語（異文化の語彙）という観点を試みたのは、茂在氏が初めてであろう。

203) 筆名。本名、政行。

204) これは、管見に入った最も有用な知見である。井上氏は、ここでは慎重に、kau = to place, to set, rest = canoe と説明しているが、自身の HP（夢間草廬、<http://www.iris.dti.ne.jp/~muken/>）では、kau = canoe としている。Mary Kawena Pukui & Samuel H. Elbert 1986 には、「kaukahi. n. Canoe with a single outrigger float」(p. 135)、「kaulua.nvi. Double canoe」(p. 137)の例があるので、kau を canoe と理解するのに問題はない。修飾語がなくとも、「kau」だけで使われていたであろう。

引用文は、KAMAKURA OUTRIGGER CLUB、<http://leiland.com/outrigger/column.shtml?kodai.html>. Copyright (C) 1999-2002 KAMAKURA OUTRIGGER CLUB & LEILAND INC.に掲載されていたが、今は削除されている。

205) 寺川真知夫 1980. pp. 141-142. 引用の際の省略個所は、……、で示す。以下同じ。

206) 小島憲之、木下正俊、東野治之 1996. p. 390 は、次のように注をする。

伊豆手船—伊豆地方で建造された船をいうか。四四六〇の「伊豆手の舟」との異同は不明。『令集解』（菅繕令・古記）に船艇の代表に『播磨国風土記』逸文に見える伝説的丸木舟の名「速鳥」と並べて「難波伊豆の類」とも見える。

寺川真知夫 1980. p. 142 は、引用の通り、大型船か、と推測する。正しい推測である。

原文：佐吉母利能 保理江己芸豆流 伊豆手夫祢 加治登流間奈久 恋波思気家牟。  
右、九日大伴宿祢家持作之。（同書同頁）

207) 小島憲之、木下正俊、東野治之 1996. p. 437 は、次のように頭注を付している。

伊豆手の舟→四三三六（伊豆手船）。歌の趣から推して、伊豆手船よりも小型かと思われる。

原文：保利江己具 伊豆手乃舟乃 可治都久米 於等之婆多知奴 美乎波也美可母。  
（同書同頁）

小島、木下、東野諸氏は、窮余の策をとったのであろうが、歌の趣では、信頼性に疑問が残り、後日、正誤の判断が示されるまでは、理論上、誤りではないものの、研究方法として許容されない。後述するが、文字表記に基づくなら、「手乃」は



「手」よりも大きいので、小島、木下、東野諸氏は、逆に解釈をしてしまっている。趣は、主観的要素に左右される余地が大きく、基準として使えないことが改めてはつきりした。解析を日本語一視点のみに頼るのは、危険であり、必要性もない。

208) 小島憲之、木下正俊、東野治之諸氏は、一文字多い/少ない、一音節多い/少ない、という程度の説明に満足せず、果敢にも、歌の趣から、手乃を手よりも小型か、と誤った推測をしたが(注 207 参照)、これでは、恐らく、小島、木下、東野諸氏は、例えば、菊は普通(サイズ)の菊で、菊乃は大輪の菊という意味の違いや、幸は普通に言う幸せで、幸乃は大きな幸せという意味の違いもわからないのではないだろうか。乃は、いわゆる海の民の言語や文化についての知識がなければ、正しく理解できないが、私たちは、今後「手と手乃」の大小や「菊と菊乃」「幸と幸乃」の違いを論じるのに、趣に頼る必要はもはやない。

209) 『日本書紀』(巻第二、神代下、第九段、正文)に、「熊野の諸手船」という船がある。

『日本国語大辞典』は、諸手船を、「(「もろた」は諸手または両手の意) ①多くの櫓のついた早船または、二挺櫓の早船。②島根県八束郡にある美保神社の諸手船神事に用いるくり舟」と説明し、また、諸手船神事の項で、「船員船子らが樟(くすのき)をえぐったくり舟に乗り、海岸で神官が擬装した事代主神に拍手をし帆をかけて六回港内をこぎ競う」と説明している(第十九巻、p. 389)。

「諸手船」の「手」は、『万葉集』の「手夫祢/手乃舟」の「手」と同じもので、手(tau)という名の船であり(後述)、「船」は、「手夫祢/手乃舟」の「夫祢/舟」と同じもので、理解を助けるための類名である。そして、「諸」とは、「しっかりと結びつける」の意味である(molo. vt. to tie securely. Mary Kawena Pukui & Samuel H. Elbert 1986.p.253)。全体で、オモキを嚴重に連結してできた手(tau)という船、の意であることは、おわかりであろう。tau(舟/船)という情報を、伊豆の知識人(たち)は、手、という漢字で書き記し、島根の知識人(たち)も、同様に、手、という漢字で書き記した、と見てよい。

210) 小島憲之、木下正俊、東野治之 1995b, p. 369 は、次のように注釈を付している。

浦廻漕ぐ一津々浦々を漕ぎ巡る、の意で、熊野船の特性を述べた修飾語。

熊野船着き一熊野船は熊野地方産の原木で製した船。その構造や機能に特色があった上に、その沿岸住民も航海技術に長じていたことで、当時、既に有名であったの

であろう。巻第六の山部赤人の歌（九四四）にも「大和へ上るま熊野の船」が詠まれている。

原文：浦廻榜 熊野舟附 目頬志久 懸不思 月毛日毛無。（同書同頁）

青木生子、井手至、伊藤博、清水克彦、橋本四郎 1980. p. 390 は、次のように注釈を付している。

熊野舟つき「熊野舟」は良材を産する紀伊の熊野地方の舟で、特異な形状であったらしい。「つき」は形状の意で、目つき・顔つきの「つき」と同じものか。上二句は序。「めづらしく」を起す。

211) 小島憲之、木下正俊、東野治之 1995a. pp. 121-122 は、次のように注釈を付している。

島隠り—この島隠ルは風待ちなどのために島陰に停泊すること。

ま熊野の船—マは接頭語。熊野は熊野船（三一七二）としてその構造・機能に特色がある船を産し、沿岸住民も航海技術が卓越していたことで、当時既に有名であった。

原文：嶋隠 吾榜来者 乏毳 倭边上 真熊野之船。（同書 p. 121）

212) 小島憲之、木下正俊、東野治之 1995a. p. 162 の注。

ま熊野の小船→九四四（ま熊野の船）。

原文：御食国 志麻乃海部有之 真熊野之 小船尔乘而 奥部榜所見。（同書同頁）

なお、「小」の字に「を」のルビをわざわざ振るからには、そのように読ませようという意図があるものと思うが、「小石」や「小島」の「こ」に読む可能性は、検討されたのであろうか。

213) 小島憲之、木下正俊、東野治之 1995b. p. 464 の注。

足柄小舟—足柄山で造った舟。「足柄山に船木伐り」（三九一）ともあった。逸文『相模国風土記』に、足柄山の杉材で造った舟は足が軽い、とある。

原文：母毛豆思麻 安之我良乎夫祢 安流吉於保美 目許曾可流良米 己許呂波毛倍杼。（同書同頁）

214) 「小船」が後人に正しく理解されていないことを知るには、「小船」とはどのような船なのか、つまり、その具体的な大きさや乗員数等を考えるとよい。注 207) で、歌の趣では、信頼性に疑問が残り、後日、正誤の判断が示されるまでは、理論上、

誤りではないものの、研究方法として許容されない、とは書いたが、歌や文章の趣が真にわかる人には、字面は「小船」だが実際には「小」さくなく、と感ぜられることがあるのではないか。

215) 地名では、例えば、広島県福山市金江町は、江に金(属)があることに由来するのではなく、江に **kau-nui** (船-大きい) があることに由来していよう。金江町金見、金江町藁江、も、金(属)が見えるのではなく **kau-nui** (大型船) が見えるのであり、江に(稲/麦)藁があるのではなく、江に **waa-lua** (双胴船) があるのであろう。

また、志賀島の叶崎や、高知県土佐清水市の叶崎も、何かの願いが(いつも、よく) 叶うからではなく、**kau-nui** (大型船) が(いつも、よく) 通ることで名付けられたものであろう。

216) 地名には、その痕跡がある。例えば、田浦(長崎県福江市)は、浦(の近く)に田圃があるのではなく、浦(そのもの)に **tau-nui** (大型船、もしくは、**tau**、船) が見られることで名付けられたものであろう。

301) 文化庁編『国宝事典 新增補改訂版』便利堂、1976年、p. 283。

302) 渡邊静夫編『日本大百科全書』7、小学館、1986年、p. 194。

303) 大谷光男 2011。p. 14。

304) 『学研新漢和大字典(普及版)』は、倭と奴の発音を、

倭 - 上古音 **uar** 中古音 **ua** 近古音 **uo** 現代音 **uə**

奴 - 上古音 **nag** 中古音 **no(ndo)** 近古音 **nu** 現代音 **nu**

とする。

305) 比定地は、既発見、発見中、未発見、のいずれかであるが、解析の精度を確保するのであれば、未発見に動揺し、出発点とした(はずの)二段に区切ったの解析から転向し、三段に区切る解析を新たな出発点とするのは、論外である。

306) 人間に、ミスや間違いは付き物である。ミスや間違いがあれば、早めに訂正すればよいだけのことであるが、『広辞苑』には、次のような例がある。

日本では、桜の咲く頃に空が薄く曇ることを「花曇り」と言い、春の季語にもなっている。これまでは水蒸気が多いためと考えられていたこの現象は、そのような説明ではもはやいけならしく、『広辞苑』(第五版)では、水蒸気が多い、という部分を削除している。古人が「花曇り」と考えた現象は、恐らく、水蒸気によるのではなく、どうも黄砂によるらしい、ということがわかったからではないだろうか。

307) 但し、倭人(委(倭)奴国の使人)が漢字を知っていた/書けた可能性や、倭人(委(倭)

奴国の使人が委(倭)奴という文字情報そのものを提供した可能性を排除するものではない。倭人の漢字の知識がどのようなものであったのか、は不明であるが、一丁字を識らなかつた、と見るのは間違いであるかもしれない。朝貢が、先進国に対する憧憬を反映したものであるとすれば、倭人が早い時期から漢字の習得に努めた可能性は十分に高く、委(倭)奴は、後漢の光武帝から日本側のリーダー格と扱われたほどであり、漢字を知る使者を手配できたのではない。

308) 五言絶句<sup>そくおこり</sup>仄起式では、初句の三四五字目は平平仄とするので、三千丈以外の選択肢はない。

309) 荻原浅男、鴻巣隼雄 1973, p. 288 は、「<sup>かからの</sup>枯野」に次のように注釈を付している。応神紀・五年の注記に「<sup>かる</sup>軽野<sup>の</sup>」の訛語という。速く走る義か、あるいは船材の産地による命名か。良い船材を産した伊豆国の地名としては静岡県三島市修善寺町中狩野の地か。

山口佳紀、神野志隆光 1997, p. 305 は、「<sup>かからの</sup>枯野」に次のように注釈を付している。船の名としての意味は未詳。『播磨風土記』逸文に仁徳天皇の飲み水を朝夕運んだ「速鳥」という名の船の話がある。それと関連させつつ、「枯」は「軽」に通じ、船の速さをいうとみる説があるが、『紀』の用字法と合わないので従えない。

310) 「<sup>ぬ</sup>からぬを」という音声情報を書き記したもので、「カラヌを」の意、と理解するのが正しかろう。

311) 「万葉集」では奴はヌ(甲乙はない)にしか使わない。(中西進『万葉集 全訳注 原文付(一)』講談社、1978年、p. 26)

付言すれば、平仮名・片仮名ができた過程から見ても、「奴」は、草書から「ぬ」、右側の旁から「ヌ」ができたように、「ヌ/ぬ」が主体である。

312) 例えば、津軽(軽 kaulua が利用する津、の後置修飾表現) vs 唐津(唐 kaulua が利用する津、の前置修飾表現)のようなケースがある。

313) 母は熱いコーヒーをもらうことにした、の意。

314) 中国語の意味は、それぞれ、「どうか私にトイレトペーパーを下さい」「油(の供給)が一秒でも止まったら、私は自分を一生咎めます」である。

315) 漢字が表意で用いられているのか、表音で用いられているのか(日本語のカタカナのような使い方をしているのか)、はケースバイケースで見るしかないであろうが、参考例を一つ挙げておきたい。

例えば、熱狗では、漢字は表意で用いられ、字面が示す通り、熱い犬、ホットドッグ、の意である（漢字の読み *règǒu* には意味がない）。一方、哀鳳では、漢字は表音で用いられており、*āifēng* という読みに意味がある（字面が示す、哀しい鳳には意味がない。 아이폰、iPhone。アップル社の携帯電話）。

316) 引用の通り、井上氏が *nui = large* としているが、辞書の説明も挙げておきたい。

*nui. nvs. Big, large, great,... Mary Kawena Pukui & Samuel H. Elbert 1986. p.272)*

## 参考文献

<日文>

青木生子、井手至、伊藤博、清水克彦、橋本四郎 1980。『萬葉集三（新潮日本古典集成 第41回）』新潮社。

大谷光男 2011。「金印蛇紐「漢委奴国王」に関する管見」『東洋研究』第179号、pp. 1-33、大東文化大学東洋研究所。

荻原浅男、鴻巣隼男 1973。『古事記 上代歌謡（日本古典文学全集1）』小学館。

小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守 1994。『日本書紀①（新編 日本古典文学全集2）』小学館。

小島憲之、木下正俊、東野治之 1995a。『萬葉集②（新編 日本古典文学全集7）』小学館。

小島憲之、木下正俊、東野治之 1995b。『萬葉集③（新編 日本古典文学全集8）』小学館。

小島憲之、木下正俊、東野治之 1996。『萬葉集④（新編 日本古典文学全集9）』小学館。

寺川真知夫 1980。「『仁徳記』の枯野伝承の形成」、土橋寛先生古稀記念論文集刊行会編『日本古代論集』笠間書院。

三浦佑之 2002。『口語訳 古事記 [完全版]』文藝春秋。

茂在寅男 1981。『日本語大漂流 航海術が解明した古事記の謎』光文社。

茂在寅男 1984。『歴史を運んだ船——神話・伝説の実証』東海大学出版会。

山口佳紀、神野志隆光 1997。『古事記（新編 日本古典文学全集1）』小学館。

<日文・辞書>

『学研新漢和大字典（普及版）』藤堂明保、加納喜光、学習研究社、2005年。

『広辞苑』新村出、第五版、岩波書店、1998年。

『字統』白川静、平凡社、1984年。

『日本国語大辞典 第二版』日本国語大辞典刊行会 第二版 編集委員会、小学館国語辞典編集部、小学館、2001年。

<その他>

『辞源（修訂本）』廣東、廣西、湖南、河南辭源修訂組、商務印書館編集部、商務印書館、1915年。

Mary Kawena Pukui & Samuel H. Elbert 1986. *Hawaiian Dictionary*, University of Hawaii Press.